

ヴェネツィア共和国の遺風

大学名譽教授
もとむら りょうじ
本村 凌二



アドリア海の女王とよばれたヴェネツィアには、きわだって独自の風景がある。あるローマ教皇は「自分は、どの国でも教皇だが、ヴェネツィアではちがう」と嘆くほどだった。教区の司祭まで住民が選び、ローマ教会の介入を許さなかったという。ある意味で「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」というキリストの言葉を徹底して守っていたことになる。

といっても、ヴェネツィア人は選挙という制度をそれほど信頼していたわけではない。とりわけ、直接選挙にはひとかたならぬ警戒心をいだいていた。近現代の人々であれば、直接選挙制は民主主義的だと思いがちである。ところが、そこでは大きな功績をあげて目立ったりした者が選ばれやすくなり、大衆の支持を得ていると見なされ、強大な権力をもつ恐れがあるのだ。その懸念にヴェネツィア人は早くから気づいていたのだから、世界史の上では驚

くべきことであつた。

前近代社会にあつては、君主政は当たり前のようなことだった。だが、ヴェネツィア共和国では、君主政への警戒も一角ならぬものがあつたから、為政者の選出も工夫がなされている。籤と選挙をくりかえす複雑な手順で、有権者選びが重ねられたという。

まず、一〇〇人以上はいた国会議員のなかから、籤で三〇人を選ぶ。

その三〇人を籤で九人に減らす。

その九人は四〇人を選挙する。

その四〇人を籤で二二人に減らす。

その二二人が二五人を選挙する。

その二五人は籤で九人に減らされる。

その九人が四五人を選挙する。

その四五人は籤で一人に減らされる。

その一人が四一人を選挙し、彼らが

元首ドージェを選ぶ有権者になる。

この四一人のうち二五票以上を獲得すれば、元首が決まる。

整理すれば、籤が五回、選挙が四回で

選挙人が選ばれ、その選挙人が元首を

選ぶのである。要するに、籤と選挙をく

りかえすことで事前工作がほとんど不

可能になる。

更に、これほど慎重を期しながら選

ばれた元首は、補佐官数名と相談して

事を決定しなければならぬ。それほ

どまでに個人の独裁には目を光らせていた。

昨年末のアメリカ大統領選挙では、バイデン氏の圧勝だったとはいえ、直接選挙制の愚直さが露呈したかのようだ。ふりかえれば、古代ギリシアのオストラシズム(陶片追放)の制度は、独裁者たる僭主の出現を防ぐために工夫されたものだった。だが、現実には政敵の追放のための手段となり、政争の道具と化した。

古代とは比べものにならないほど、現代の直接選挙制は大規模である。だが古代ローマの共和政と並んで、世界史上に燦然と光を放つヴェネツィア共和国一〇〇〇年の歴史には、今日でもまだ襟を正すべきところがあるのでないだろうか。

(略歴)

東京大学名譽教授。1947年、熊本県生まれ。専門は古代ローマ史。『薄闇のローマ世界』でサントリー学芸賞、『馬の世界史』でJRA賞馬事文化賞、一連の業績にて地中海学会賞を受賞。著作に『多神教と一神教』『愛欲のローマ史』『はじめて読む人のローマ史1200年』『ローマ帝国 人物列伝』『競馬の世界史』『教養としての「世界史」の読み方』『裕次郎』『教養としての「ローマ史」の読み方』『独裁の世界史』など多数。